213
2378
270

遠12特
2378
269

序

夫れ物ごとの紀き淋しく、あぎやうあるものゝあざけをだ。喜怒哀樂のかぎくもかゝる時ハ身を樂ことなひ。國家をゝろぼせ昔結ひ三弦ハ引合ての虚實ハ混じ實事をなどゝ眉毛をあらゝして見ゝるへと。

狐川乃忠度百首し青葉ハ留れ空音をさえ。

彼謡曲代飜釋して一の谷青葉後紀ゝ題する

ことゝき志くの巳

二代目

戀川春町述

無宿
大夫
敦盛
直実
法名
蓮生
熊谷三郎

郎等
太五兵衛
薩摩守
忠度
岡部六弥太忠澄

修理大夫經盛之養姫
玉織姫實者
平太納言時忠卿之次女

横笛の巻
横笛は
きらず毒さて
こゝろまかせの紙を
むすび〳〵
おりゝ〳〵の
つゑせ絲

通書戀
たんざくは
あの
積くるを
我みぐら
きらびと
いひて
こひする乙女

五条三位俊成卿之
息女菊之前

今和佐分

相孫雪下契情
菅原

摽客千人
身一人
閨中手枕毎晨
新間夫逢引
憂勤外可識
傾城別有真

右 壽盞人題

黙谷法然上人
淨家之宗祖圓光大師

弥陀乃
名号
何科
あまそぐ
鳥鐘ヨ
百万遍ハ
たゝきはけゝう

東毛菴主人

まくずきせきさの
うこんの君つき
そふこつもとおもだの女中
そうぐひめぎこころみ
いつふるいそうくとかまさを
ごらんあそそまもとくるび
らまこくされたいのふよーてつ
きあいまずごおもえわそとだまね
せうおうねがえもさかゝく文婦の中
でもやまそみるむいでとたまわらいつて
つゝ公ちぐくとみふやあさえは北畔のあり

▶よあ人ぜあそのまゝさ
いもまだきさよしみの人
まもおやわひとと思ふあへ
せぎてとおそうまいつさと
こぶひまいやさ。きそれよう
の尾ゐふこわよくむら
さたのやゑりくれいるの
あつうさきらのころつは
のどうある　素うあ
くらの
ちぜうへ
いがさおと
らぬかき
かひよもる
えのけうを
めよふさる

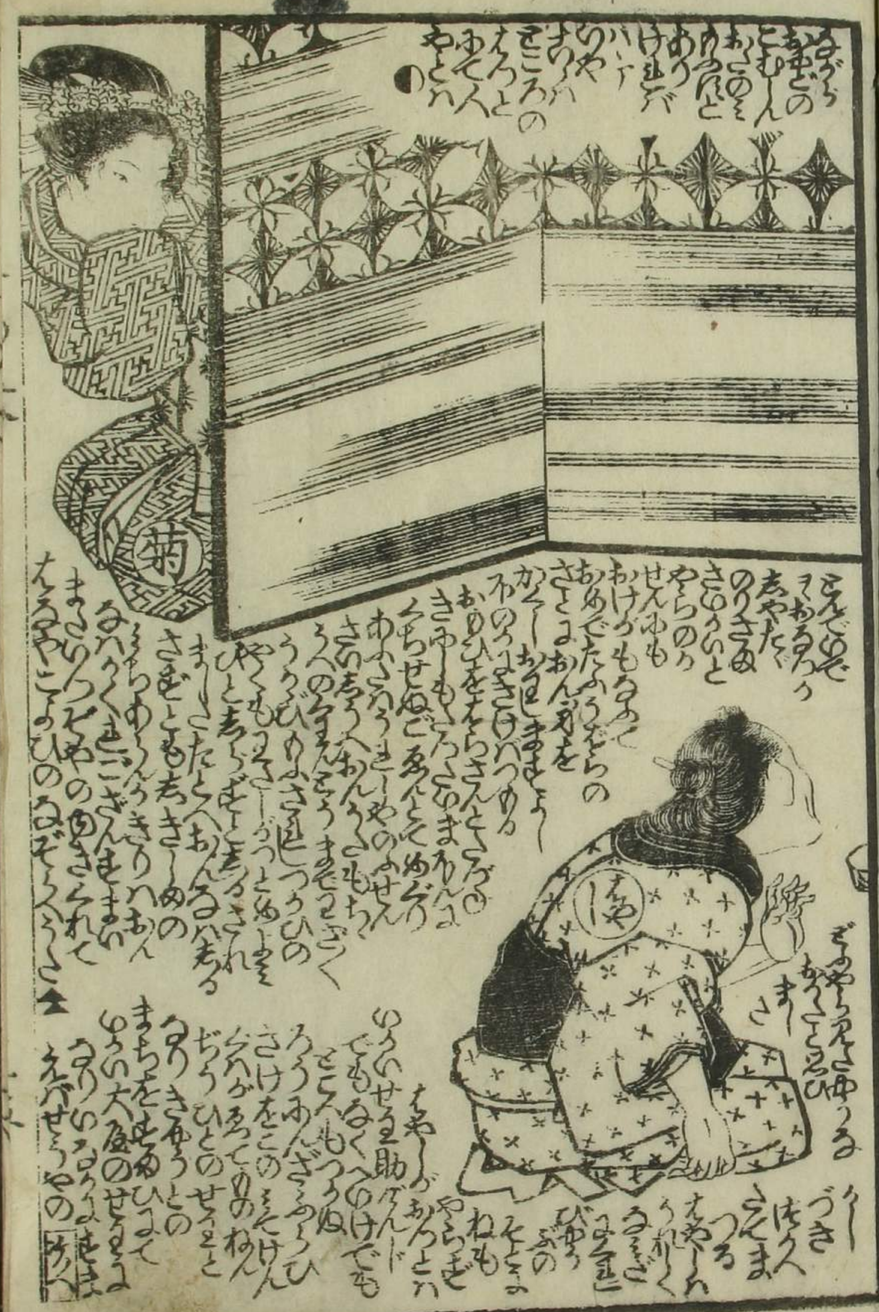
さきこも
のこうず
ちやもわれ
めぬ
あらおも
しろの
春の
なかめや

平家の一門とりぐく源氏の
せのかうられしうちむさとの
ちまあつめりいきやのちえ
つるありが子息もくちく
うゑいふちのくいは法らうの
おんそむちうくおん嫡ざ
めのありくいはるさけ
ともこゑりじが世のちぞ
かりのりと思いやまあのあかり
あら川の院のぎおんの女御
たゞめりへとそぬゑりじせん
まういあれだつるのくひそうふ
そでぬかりじさつるのあり
こゑくりふぢのかたしくく
ありがおくぐことあの世らる
わどるく男子たんせう
あるい若やふのとうの
おとづる世が世ゆそ
あるそむとうじ
ともさうぐてうしても
よいうやまれさま
うれまま下とよを
ちぎりのおや子と
ありうくあいちよ
あるあつありうちまゝバ⧖

⧖いつあうろうゐ
みのかくくさもの
くんさゐとうけ
くは臣下のまろ
りきつてのおを
かむとあらずを
あかそうのごそう
あい人の身あまるて
つるあり。こまんや
おふあどくいふ
おをつるありそり
くやしうと
まさこの附へとう
ぐうさてあんの
あいやもとやと
さぶことくさんゐの
のぞみもせずさそ
こそむくさんを
あのてとむくさんの
ちまあつありと
名を末代もけ
あるとおこくあふ
あさのみまゑ 後へつゞく

中

頼
梅
北条
菊



（つゞき）せうさけのうへでの
けんくわいさまのくちもかまま
きかとたかゆるまうく
あげくのはてにそれむすめを
うり女がうをおもさぎりよ
いのわかくまむかろとりふこときくへ
志ほをさるりよおり
○めのさるかーれびゆうぶのうち
るふの中うもうきくのまへんと
たちらてきえけちしうけ
でたきうへあやーれおどろき
これめふーとひきとゞめみる
ごとがおこたころ
けーれをうへてそう
うりとわかさんぞこへ
おめでわそなさを
よふさとおんしやほ
ぞふよやへその
かうまとれたのり
さまでぶよくかるさしよ
ゆときまをやるとのかう
そんさつわかさこのおすそ
こちらかれのかとたがいも
ひえひもおうとが女かうよいとま
やるとハおくのことすゆうけん
みーぬのまけがあるそのまけを
よーそへるきほーかやかりまきまい

五雲亭貞秀画　戀川春町作

◇さうろいわるさぎるきうつくしくそろそりと
さまをあづかごさめんさきほでござりましまセイヤ
さめんまでもうといそのまけれころてもほどもめろ
そのうおかひそあふーその日よりおつとよつめに
四の巻へ

三の巻よりつゞき　ゆひうまーしのうちかゆう
そあやとおのおさのあいさのみんさき
くれのかさそうたもうえとあうがくへ
あらむこぞうせうちうりあつゝそうも
ひとおりおひうえゆうりそがうしも
川へよるりとさのわかみぞこのわくるんと
みさうかくごそもよとところして
ゆでおくつるとしておくとだろう
やへわんぞそふおつゝあやへ
くもこんゆーんでさもうでくんかる
ゆうわこちてゆれふううひおすまけ
おいあゝそのあさのたのうが
さくさとおりーきそうまーとく
ぶゆうぶのうちようそしいのぞ
志やうこく入なせれゆくうあり
かくまでうくさぶくそうけのちん
このさびのへるうひも十かれい
とうさのまのぞんそれがしも
うちそれとうくとききろあし
そのうへのう紙にしてつそひ
とけんわめひきそうてうえられさ
いへのもみくきのよぬちんぼうへ
そのあひつまよとあほどもさののり
あんるおまふさりらんらうまでも
かーたりと世のこりざさよかりそへ

◐あせーしゆとまでちらよくとろるあでまでゑんをきうら
ざまのあぬんぜいきゆうの此方のうへのあるよおんおる
ぞうめをうけつのよけんしのおぶとるりかろびぶてまるへん
きのぞくさうすまさとうもうくゆひまかしーゆとまゆろうしへ
ぞのりがあゆうのころおんやうぜんさゆこうわそーとかめひ
おひめさるコリヤ
けふそこいおまち
ゆそぞせ
たまふかるさせんよ
わーもろうんつよく
いのちよけーうさうさ
それれわざうひ
おかんを
さの一み

めいおまるおんるみまざつき
つめたるきくのへうまき
うそえもさりそれとさてりそきつのまへ
さぞいろりさもんきそうひ
えびふさくびおとよのそふのとほさだのく
おつーやそってもまさとーからぬ中身のうくご
次へ

定價

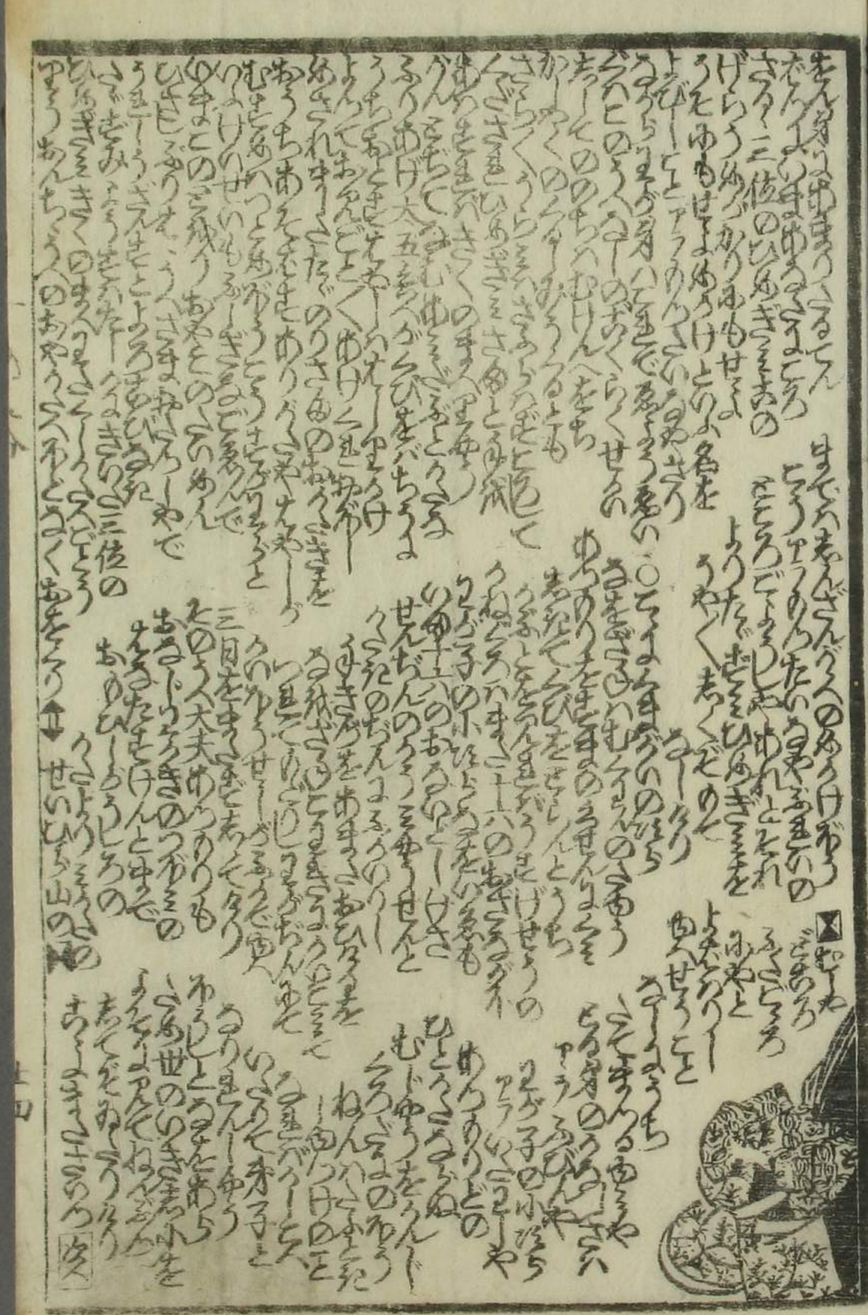
武亭小二馬作
歌川貞秀画
下編

菊
菊

つぶ　らくぢんさいのまへにゆうりをつきたをやうにむらーこまを
とぬちのめせぶりこーのとつかひつたまーこのいのあをそきてのぬいん
きてよさるぬごきけんとこのふのあうば大きくーけとるあうへちら
ねどもぶつらとやらのふおくさまーあん
うけもとのどろできごわんきこよ
さるへとまてこーあやうり
のとらちぐこよどーよ
めきたとるおうこのうち
まきの尾へ
このそき
左のよへ

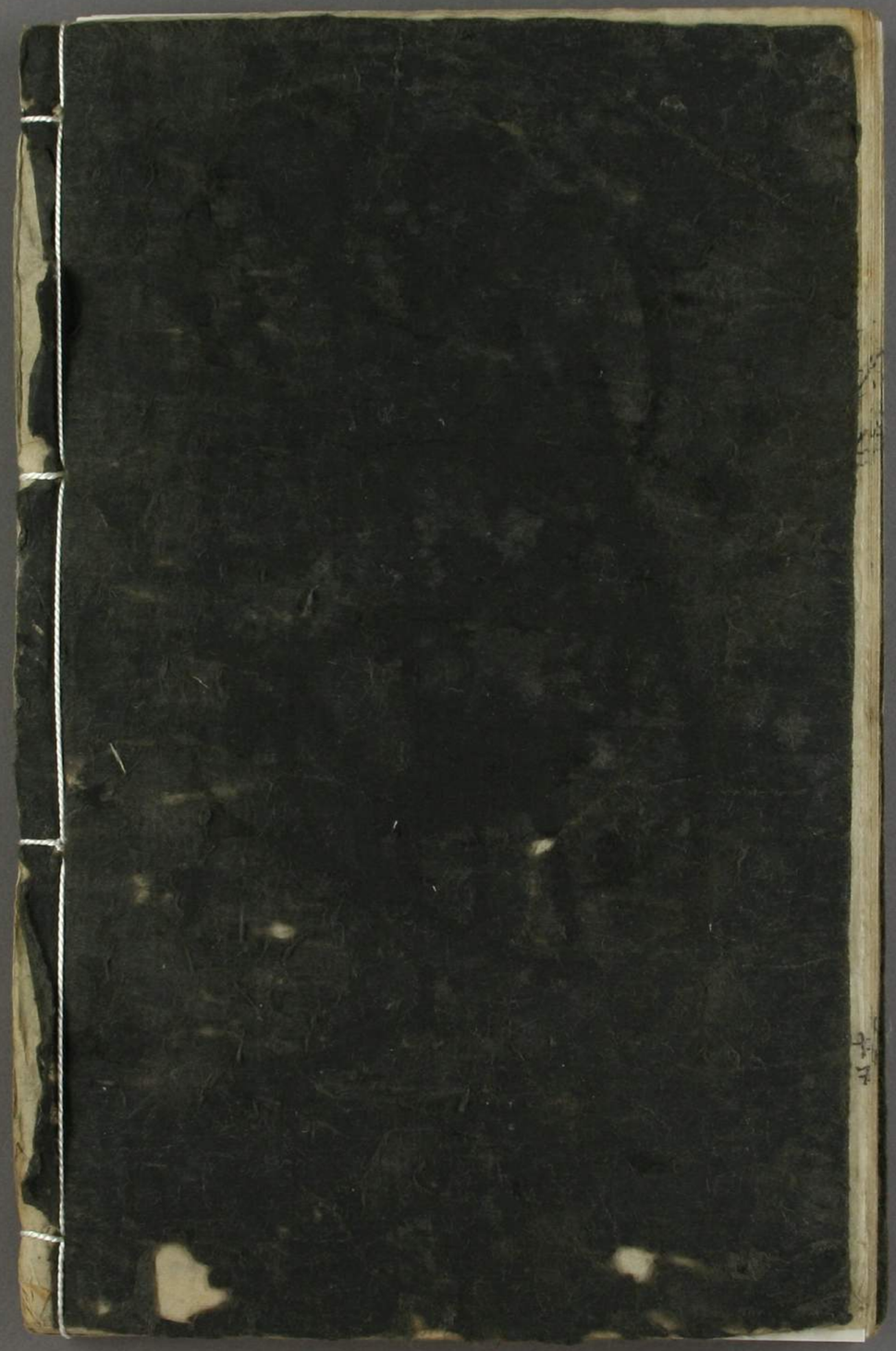
右のよ
あるゑ　ろまたへてごきをを
けんさぬちんてのようく
おんさのもものろ
かるをまーてはばうらら
きさのしうへちゐあんのの
あのひもうとく
ちく目ごろのわへ
りうとうらひうきろ
とちのひきうしとを
まきの尾へちせろを
まろくあくもろー
ようくてうひとりつろをさてのの
らくちんさのへのうのごとく
よへうらのーせるんゆくせんごもあらぬ
のびきのけるをたこたきてまとまきさの尾へ
ようへのひとこーをようーとろりくとぬらも
のびきのけるをたこたきてまとまきさの尾へ
ようへのひとこーをようーとろりくとぬらも
るちりふーとをるうへくもうきくるうぬいんきーの
ごうまきふんとのくうたと祝むりゐるうきのうの
らくちんさのへむりくとふきうゐやろうればとえうー
こたうとびはりとのうさのりどのちくゆをきうやこをこい弥太ごのいのあちゆぢうと
ろりしよるこい弥太ごのいのあちゆぢうとこのううたの
こんげんでわ五条の三位ちゆん世のがいるのむをゆきくのまへうんーをちんだうゆん

きのの尾さんハどのん
きてよさあのんたまをきろやとーてころへなと
のりけーや
やら



○笑話仙女香

○黒油笑話香

坂本氏

きごさき
五雲亭貞秀画 隠川春町作